

踏み跡 <My Mountains>

九州(英彦山)

別所から英彦山

No.184

早く九州の山歩きを始めて、東京の昔の山仲間たちに自慢話を聞かせてやりたいと思って、着任早々博多駅前地下街の本屋で「アルパインガイド 九州の山」を購入し、通勤のバスの中で学習を始めた。九州各地に点在する主要顧客への挨拶まわりなどを中心に、新しい出来事を体験しては驚いている内に半年が経ち、年末になってしまった。まずは一つも登らずに年を越すわけにはいかないだろう、一步踏み出そうということで、このガイドブックのトップに出てくる「英彦山(ひこさん)」を目指すことにした。東京周辺のように鉄道の便がよくはないし、登りたい山の近くまで便利なバス路線が充分配されているとは限らないので、九州の山登りには自家用車が不可欠との結論も導き出した。

昭和54年12月15日

自宅を朝6時50分に出発。福岡の12月、6時50分はまだ薄暗い。

国道201号線経由で八木山峠(やきやまとうげ)を越えて飯塚へ。八木山峠から見た朝もやの中の飯塚の町の眺めは素晴らしい。

飯塚から田川、香春(かわら)を経て、国鉄の彦山駅まで自宅を出てから2時間20分。

人一人歩いていない登山道路と名がつく道(バス一台分程度の道幅)をさらに奥へ入り、別所の英彦山神社駐車場に9時30分に到着。だっ広い駐車場に止まっている車は我が車の他にはもう一台だけ。後は寒い北風と枯れ果てた木々のざわめきだけ。

石段を登ると左右に土産物屋と旅館が並び、信仰登山の昔が思い浮かべられそうな光景が続く。歩きながら丹沢の大山の登山道を思い出した。(右写真) 門口から箒をもった中年の女に呼び止められた。

「山へ登るのか?」と言うので「そうだ」と答えると、「寒いのに良く来たね、今日山に入る人は二人目だ」と言う。

「福岡に引っ越してきたばかりで・・・」と言うと奥から絵入りの地図を出してきてくれた。

奉幣殿(海拔733m)では朝の儀式のためだろうか建物の中に入って行く神主の行列と、庭を掃除する巫女の姿があった。

奉幣殿から中岳まで、飽きるほどに続く石段と立派ななりをした杉の木、石段の苔、薄らと積もった楓の葉、融けずに残った雪。時々石段が中休みするところがあり、そのたびに中津宮などなど色々な建物に遭遇する。海拔800mあたりより上は杉の老木と熊笹の世界。

石段を登ること1時間45分で飛び出したところは中岳。時刻は11時15分、昼食と大休止とする。食事をとった後地図を片手に周りの景色の確認を試みた。耶馬溪方面がかすかに見えるのみで、北側は小雪を飛ばしながら日本海の冷たい季節風が迫ってくる。休んでいても体が冷えそうなので、食事だけで休憩は切り上げた。

11時50分出発、北岳(1180m)を往復したあと南岳三角点(海拔1199.6m)を踏み、さらに南下。熊笹の続く稜線、風はないが寒々しい空模様。



右写真：南岳山頂

左写真：中岳で昼食



大南神社を過ぎると、樹齢1200年の巨大な鬼杉。天然記念物に指定されており、周囲12m、高さ80m(だったが、今は38m)。その名のゆかしさにひかれた岳滅鬼山(がくめきやま)へのルートを少々偵察。

踏み跡 <My Mountains>

次は玉屋神社、色々見るものがあり飽きさせないコースだ。

岳滅鬼山を対岸に見ながら、山肌を縫うようにしてゆっくりと下り、(右写真)奉幣殿を経て今朝の駐車場に16時50分に帰着。

我が九州の山デビューの山旅は無事終了した。

海拔1200mというと、東京周辺の山なら

ば低山の部類に入るところではあるが、日本海から吹いてくる季節風とその風が運んでくる雪。九州北部の山では、この裏日本型の気象を強く意識しておかなければならないようだ。特に冬場は「低山」と思って侮ってはいけないというのが初体験の印象である。



以上

